

この本は、青山で鳴くコオロギです。



松木直也

文

エッセイを超えた風俗物図鑑

東京

つちよ

物語

豪華3本立て
東京物語(Queta)
モノ語り(鳩よ)
変な人(ホバイ)



安西水丸

絵

この本は、梅干しの中にいる天神さまです。

東京こちよこちよ物語

1985年11月15日 再版発行

著者 松木直也・安西水丸 ©

定価 980円

発行者 若林照光

発行所 若林出版企画株式会社

〒101 東京都千代田区神田須田町1-18

共同ビル

TEL 03・254・7731

振替 東京019340

印刷所 中央精版印刷株式会社

〒335 戸田市美女木1227

東京・ちよ・ちよ物語

文・松木直也
絵・安西水丸

目次

こちよこちよガイド 5

東京物語 17

モノ語り 145

変な人 185

対談 223

アートディレクション 井口久夫
デザイン 井口久夫・独鉆忠夫

ガ
イ
ド
こ
ち
よ
こ
ち
よ



竹田 明道

二十一歳

イラストレーター志望
趣味 プラモデル制作



中村 佳子 (三十一歳)

広島出身

スーパー
勤労

趣味
料理





東京こちよこちよ物語 こちよこちよの意味

先日、家でゴロゴロ日曜日をしていますと、突然、TVから凄くパンチパーマの似合う男が浮かび出して驚きました。

ちようどお昼をまわった頃でTVでは「NHKのど自慢」をやっていたんですね。確か、あの時は三重県河芸町からの、のど自慢でゲストは森昌子さんと鳥羽一郎さんという新人。

いやあ、パンチパーマが似合う人が日本にいたんです。よかった。

その人は、年の頃なら26、27歳ぐらいで、仕事は昼間は大工さんをして夜はカラオケ・スナックでカラオケのミキシングをしています。



る。なんでこんなに私が詳しいかというところ。この人は歌がとてもうまくめでたくキンコンカンと鐘ならし、司会の金子アナから「おめでとうございます。お名前とご職業は」の質問の答えを私が聞いたからです。

残念なことにお名前と歌った曲の名前が思い出せないんだけど、感情がこもっていて、一寸の迷いもない歌唱法に満場の観客はおしみのない拍手を送り、みずから興奮と歓喜のるつぼと化した。オーバーだったかしら。

で、その人は顔がぼっちゃりで張りがあつり、小太りで身長は174センチぐらいです。見るからに力持ちのやさしやさんといった感じで、甘いモンには目のなさそうな人でもありました。なんか頼りになる大工さんという雰囲気でマイク片手に歌に酔っ



て目をつぶることなく、少し大きい顔で鐘が鳴るとすぐ飛び上がって両手でガッツポーズ。腕なんかも太く、私は思わず鳥肌が立ってしまいました。

この人には似合うんですね、パンチパーマが。顔のホリも深くなく、ちょうど坊主顔だったのが少しのびて、それにパーマツ毛があるわけで目は丸くて少なくて二重。なんか髪の毛が薄くならなかったアート・ガーファンクルみたいな感じ（かなりたったガーファンクルですが）もしました。

もう、この大工さん、絶対にその日の夜は大変で、まず棟梁から「でかしたぞ」などと言われ飲むことになり、同級生や仲間が集まってカラオケのあるスナックで祝杯をあげるんでしょうね。最後にのご自慢で鐘を鳴らした歌をみんなで歌ったりして、

カネ三つ女（持ち歌）他人毎



やがて棟梁が会計を済ませ、その大工さんに「今度はヨメサンで鐘ならさなくちゃなあ」などと笑顔で言うに違いない。いいなあ。

また、この日の「のど自慢」では結婚20年目と30年目のカップルが共にデュエットで登場し、共に手をつなぎあつていて見事なものがありました。愛は永遠、心はひとつなのでした。鐘はふたつでした。

さて、この「NHKのど自慢」って何10回と見ていくうちに、「この人は歌うまい、絶対鐘いっぱい」というのが歌う前からわかるようになる。出る時の落ち着きとマイクの持ち方とマイクのコードの処理のしかたと、歌い出す瞬間の会場を見る目つきでほとんど当たるようになる。また、人間は照れを隠すときとんでもないことをしてしま

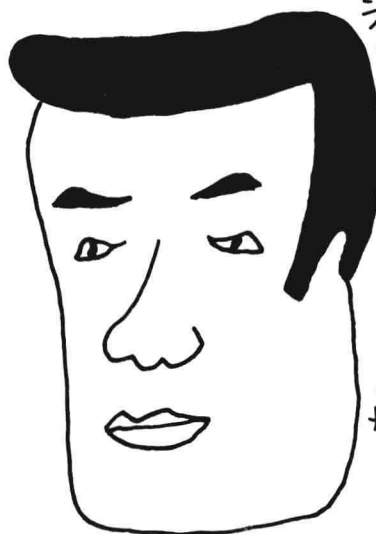


うということもわかる。さらに、歌の楽しさがわかる。どここでは書きたい。

それから、必ず異常にアガッている人もいれば舞い上がっている人もいれば落ち着いて余裕がある人もいれば、そんな人のフリをして実はアガッている人もいる。なかには会場でアガッて手を振ったり、応援のたれ幕をひらひらさせている人もいる。金子アナは汗っかきでいつもハンカチを持っています。

きつと見ている人のなかには毎週欠かさないという方がいられると、水丸さん(のど自慢ファンのベテラン)も私もうれしいのですが、毎週必ず2、3人ぐらい見ているうちに、こちよこちよとしたくすぐりを与えてくれる人たちがいらっしやいます。

代表的なタイプをあげますと、根も実も



カニ三つ田力(持ち歌)兄弟舟

花もすべておっちょこで笑いを誘う人。また、変なクセのあるリズムのとり方をする人などもあります。さらに、着物なんか着てヘアースタイルが顔より大きくて重厚な感じのおばさんも(人がよさそうでもある)、かなり気持をときほぐしてくれるがごとき、こちよこちよしてくれる。歌のサビのところで体をややのけぞらせてマイクに力を入れる様など、もう「ヤツタネ」としかいいようがない。ダンナはこのしぐさにまいて彼女と結婚したに違いないなどと余計なことまで考えてしまう。

残念なことに、「NHKのご自慢」を毎週楽しみにしてマス」となかなか人には告白できないもので、女の人に言うとき笑ったりする人がいて、「あら、この人地味な人、デイスコなんかに行けない人」と判断される場

恋愛人タイプな女(時)歌うと



合が多く、となると、「私はペリエのあるレストランにも行ったことがある」と言いたいが、そんなことをいうと「ペリエを飲んでいるのが今、いちばん新しいと思ってるだ」と思われそうで怖い。「のど自慢」とペリエもあまり結び付きの深いものでもない。私は、外人みたいと人から言われたことは一度もないが、もし数多くの女性から「キアー、外人みたい。こっち見て」と言われても髪は金色に染めないだろう。もちろん、そんなことは言われるわけがないけど、金髪に染めている男の人、女の人、もいるが、気持はわからないわけではないが、その行為には過剰なこちよこちよしたものを感じる。

どうせ髪を金に染めるなら眉毛もして欲しい。よく髪が金、眉は黒々という人を見る。

かけるがそうじゃないんだから気をつけましょう。話がそれてばかりで恐縮ですが、この「東京こちよこちよ物語」は、のど自慢的なこちよこちよした発見を好きな人、もしくはペリエなんかでもこちよこちよされてしまう人に特に読んでいただきたいのですが、えーと、うんちくとかそういうのはありません。見るがまま、事実そのままを単にスケッチしたに過ぎません。時々、前出の着物のおばさんがマイクにぐっと力を入れるように鉛筆を握ったりしたことはありますが、街や時代や人やモノなどのこちよこちよに、くすぐられるのもどっかがほぐれたりして私はやめられません。

（85年 松木直也）